

MUSEOLOGY

実践女子大学
博物館学課程

no. 44

MUSEOLOGY

CONTENTS

卒業生による活動報告

本学非常勤講師	嶋田 紗千	1
世田谷文学館	川本 瑞貴	4

2024年度博物館実習先一覧	7
----------------	---

博物館実習報告

群馬県立近代美術館	8
埼玉県立近代美術館	9
荒川ふるさと文化館	10
江戸東京たてもの園	11
日本民藝館	12
実践女子大学香雪記念資料館	13

梱包実習報告	15
--------	----

博物館学課程の受講について	17
---------------	----

卒業生による活動報告

海外で文化遺産
保護活動

2000年度資格取得

嶋田 紗千

はじめに

人との出会いは不思議なもので、まさか自分が海外で文化遺産保護活動に協力することになるとは想像もしていませんでした。

子どもの頃から絵画を見ることが好きで、美術史を学んで学芸員になることを中学生の時に決めました。美学美術史学科ではさまざまな時代や地域の美術に触れ、充実した日々を過ごすなか、西洋美術史、特に東ローマ（ビザンティン帝国）と西ローマの文化が融合した地域に関心を抱きました。もっと深く学びたいと思い、ビザンティン美術史を専門に研究できる岡山大学大学院へ進学しました。

人との出会い

ちょうど私が入学した年に、恩師の鐸木道剛先生（すずきみちたか、元・岡山大学教授）が久しぶりにセルビアの修道院を訪れ、帰国後にその話をされたのがセルビア美術に関心をもったきっかけです。ギリシアとイタリアの間にあるセルビアは旧ユーゴスラヴィアの一つで、1990年代内紛が起こり、長い間渡航が困難でした。2001年に治安が改善されたと知り、ぜひ直に聖堂装飾を見てみたいと思いました。すると、留学したらよいという話になり、翌年ユーゴスラヴィア共和国政府給費生としてベオグラード大学哲学部美術史学科で研究することになりました。当時、日本からの留学生はまだ少なく、推薦者がいれば奨学金がもらえる状況でした。3年間の留学中（2002-2005年）に国名は「セルビア・モンテネグロ共和国」へと変わり、2006年以降は「セルビア共和国」となりました。21世紀初頭は国政が大きく変化する時期

でした。

午前中セルビア語コースに通い、午後は専門の講義や教会スラヴ語を学びました。すべての単語は分からないながらも中世美術について現地の研究者の見解を知ることができました。長期の休みには友人と一緒に山奥の修道院を長距離バスとヒッチハイクで巡りました。ちょうど留学している時期に鐸木先生が共立女子大学の木戸雅子先生と現地の研究者と一緒にヤシュニヤ修道院のフレスコ画の修復と研究をはじめ、視察に同行させていただきました。いつか自分もこのようなプロジェクトを行い、セルビアに恩返しできたらよいと漠然と思いました。

帰国後は岡山大学で修士号を取得し、博士課程に進学したと同時に群馬県立近代美術館で働くことになり、その後、世田谷美術館、多摩美術大学で学芸員として務めました。美術館では展覧会の準備だけではなく、絵画や彫刻の修復に立ち合うことがあり、修復家からさまざまな話を聞くことができてとても刺激的な日々でした。

研究から離れていてもセルビアについての講演会や展覧会があると誘われて関係は途絶えることはありませんでした。2017年に5年ぶりにセルビアを訪れる機会があり、ベオグラード在住の後輩がコソヴォに一緒に行ってくれることとなりました。それがきっかけで仕事を辞めて、研究を再開することにしました。私が留学していた時期はまだコソヴォの治安が悪く、グラチャニツァ修道院やデチャニ修道院、ベチ総主教座修道院などセルビア中世の最高峰の修道院群（14世紀）を訪れることができませんでした。

2018年に現地の研究者のお陰でコソヴォの修道院に滞在させてもらい、フレスコ画の調査や撮影を行うことができました。夢のような日々でした。その帰りに13世紀の傑作であるソポチャニ修道院へ向かう際、フレスコ画の撮影許可を取るために現地の修復家を鐸木先生より紹介してもらいました。その方から修復への協力を求められ、現地の恩師であるゴイコ・スボティチ先生と鐸木先生に相談して、住友財団に助成を申請しました。同時にセルビアに関わる企業に寄付をお願いしたところ、大日本除虫

卒業生による活動報告

菊株式会社（蚊取り線香の金鳥）が支援して下さることになりました。蚊取り線香に使われる除虫菊はセルビアが原産地なため、ユーゴスラヴィア王国時代から長い付き合いがあります。

中世セルビア王国の美術

ビザンティン美術とは東方正教会の美術を指します。セルビアはビザンティン帝国に支配されていた時期もありますが、12世紀末に中世セルビア王国が成立し、独立正教会（セルビア正教会）を樹立します。そのため、ビザンティン美術の一つに数えられています。

ビザンティン美術史において現存する作例は少ないといわれます。その理由は15世紀半ばにビザンティン帝国が滅亡し、周辺諸国（ギリシア、ブルガリア、マケドニアなど）もイスラーム教のオスマン帝国に支配され、信者が減り、そして聖堂などが破壊されたからです。セルビアも例外ではありません。しかしながら、正教への信仰は継続できたため、聖堂や修道院を守ることができました。

今ではビザンティン美術のモザイク画を見るならギリシア、テンペラ画ならロシア、フレスコ画ならセルビアといわれます。13世紀以降、ビザンティン帝国が衰退し、多くの職人たちがセルビアを訪れて伝統的な絵画技法をもたらし、そして画家を育成したからです。国教となったことで王朝の資金が注がれ、比較的規模の大きな聖堂が建てられ、そして色彩豊かに彩られました。人材、技術、資金が揃うことで14世紀には文化的に最盛期を迎えます。15世紀以降も聖堂は多数建設されますが、規模は小さく、フレスコ画の顔料の質は低く、かつての水準とは比べものになりません。しかし、これらも歴史や文化を語る遺産として大切にされています。

フレスコ画修復プロジェクト

2021年と2022年に二か所の聖堂フレスコ画修復をコーディネートしました。

1件目は2021年にセルビア南西部の都市ノ

ヴィ・パザル（古都ラス）にあるジュルジェヴィ・ストゥポヴィ修道院（聖ゲオルグの塔修道院の意）のドラグティン王礼拝堂（13世紀）です。中世セルビア王国ネマニチ朝の創始者ステファン・ネマニャの曾孫にあたるドラグティン王によって建立され、死後、そこに埋葬されました。こういった聖堂を墓所聖堂といい、王朝の歴史を語る際に必ず登場する重要な文化遺産です。

プロジェクトは、約二ヶ月間、4から6名の修復家によって行われました。フレスコ画の洗浄、モルタルに含まれる砂から表面に排出される塩分の除去、小さい剥落部分への補充、剥離しかけた壁への補強、以前の修復時に補充したモルタルの差し替え、落書き等の除去、最低限の着色などが実施されました。プロジェクトの目的は「よりよい状態で将来へ引き継がれること」です。そのため、支持体である壁の保全に多くの時間を注ぎました。過剰な加筆はせず、大きく破損したところはそれ以上剥落しないように抑え、できるだけ中世時代に描かれた状態を再現するという難しい方法を目指しました。そのため、剥落した目や口などは描き足さず、また重力で大きく剥落した天井のヴォールトは固定のみとしました。モルタルに含まれる塩分によって白く霞んでいたフレスコ画は希釈した溶剤で洗浄することでかなり色彩が鮮明になりました。

パンデミックの渦中に実施したために修道院にほぼ缶詰め状態となり、そのお陰で修復過程をしっかりと視察することができました。また長期滞在できたことで、日々のお祈りの相違が学べ、正教への理解が深まりました。

2件目は2022年に南東部の町レスコヴァツ近くのヴェリキ・クルチミル村にある昇天聖堂（17世紀）で行いました。基本的な工程は同じですが、この聖堂のフレスコ画は煤の汚れを隠すために後世になって油絵具で上塗りされていました。それゆえ、洗浄するのに時間がかかりました。きれいに除去されたことで下に描かれていたフレスコ画の層が現れ、全く違う聖堂に生まれ変わったように感じられました。

これらの活動がセルビア科学芸術アカデミーで認められ、外国人共同研究員となり、また駐日

卒業生による活動報告

セルビア大使から「日本に於けるセルビア美術普及への貢献」で表彰されました。

おわりに

博物館学を学ぶことは、学芸員資格を得るためだけでなく、文化遺産保護の役にも立ちます。私はフレスコ画修復に携わる人々とたまたま知り合って、なおかつ日本の民間企業から支

援が受けられて修復プロジェクトを実施することができました。視野を広く持つことで学んだことを生かす場はあるのではないのでしょうか。

現在、新しいプロジェクトをベオグラード大学の研究者とセルビア正教博物館の学芸員と企画しています。15世紀から19世紀に制作されたイコン（板絵、テンペラ画）45枚の修復を行う予定です。また何かの機会にご報告できれば幸いです。



修復の様子

世田谷文学館

2014年度資格取得

川本 瑞貴

世田谷文学館について

世田谷文学館は1995年に東京都内では初めての地域総合文学館として開館しました。当館は初代館長・佐伯彰一（アメリカ文学者）の提唱した「文学はあらゆるジャンルに遍在する」という運営方針のもと、文学作品はもちろん、映画・音楽・写真・絵本、もちろん漫画も文学作品として調査研究を行い、分野の枠組みを超えたジャンル横断型の展覧会を開催しています。また、展覧会のほかにも当館の特徴的な博物館活動として、教育普及事業に力を入れている点もぜひお伝えしたいと思います。当館の普及事業は「ことば」をテーマに、これまで「ことのははくぶつかん」という名称で、俳句や落語、ダンス、絵画制作や音楽作りなどの創作活動のほか、山登りを含む野外ワークショップを行い、文学を大きくとらえて対話の輪を広げるコミュニケーションに重点を置いた普及活動を行ってきました。現在は「どこでも文学館」（愛称：どこぶん）と名称を変え、子どもから大人まで、年齢や性別を問わず参加できるさまざまなワークショップを継続して実施しています。また、先のコロナ禍では当館では初の試みである、在宅でも参加できるオンラインワークショップを実施しました。SNSツール「Instagram」のインスタライブにて、リアルタイムで講師と参加者をつなぎ、双方向にやり取りしながら創作に取り組む工作ワークショップを実施し、様々な制約のある状況下をチャンスに変えながら、来館者のニーズに合わせる企画を実施しました。このワークショップには、普段は在宅で障害のあるお子さんの介護をされている方や、遠方にお住まいで初めて当

館のワークショップに参加された方から、「楽しんで参加できた」などのコメントが寄せられ、普及事業の新たな可能性を実感した業務となりました。また、当館では開館4年目から「出張展示」という事業を行っています。本事業では、世田谷ゆかりの作家や作品の紹介のほか、企画展の内容をコンパクトに持ち運びできる展示キットを構成し、区内の小中学校や図書館ほか、全国の公共施設までを対象に貸し出しを行っています。このような利用者を館に迎えるだけでなく、出張型の展示やオンラインを活用して、博物館から様々な企画を提案し出向いていく「どこでも文学館」は、当館でも最も重要な業務の1つであるといえます。

館内での取り組みの1つとしては、2015年から「セタブンマーケット」と題して、当館にゆかりのある作家たちに身の回りの品を出品していただいたり、区内の古書店や雑貨店を募って館内で出店してもらう、蚤の市を開催するなど、開館当初から現在まで、さまざまな形で「文学に触れる・文学を体験する」機会を提案しています。

収蔵資料の面では、世田谷文学館の収蔵方針として、明治期以降の世田谷区にゆかりのある作家や、世田谷を舞台とした作品など、区ゆかりの作家・作品を収集し保存しています。2024年時点では収蔵資料数は10万点を超え、主な収蔵資料に横溝正史や江戸川乱歩、斎藤茂吉、北杜夫、山田風太郎、森茉莉などの自筆原稿や



「出張展示」群馬県川場村での展示風景

卒業生による活動報告

書簡のほか、海野十三の8ミリ映写機や横光利一など作家の愛用の品々など、原稿や書籍のみならず作家の人となりを知ることのできる多彩な資料を収蔵しています。また、当館のある世田谷には、映画会社の東宝の撮影スタジオがあることから、映画監督の黒澤明『七人の侍』の人物スケッチ、『人間の条件』などで知られる小林正樹の撮影台本やスチール、世田谷ゆかり作家である林芙美子著の『浮雲』でメガホンを取った成瀬巳喜男の映画関連資料などを収蔵しています。このほか特徴ある収蔵資料として、特撮作品「ゴジラ」や「ウルトラマンシリーズ」の撮影で実際に使用されたウルトラマンタロウの小道具のヘルメットや銃、台本などの資料も収蔵しています。

当館にはいわゆる常設展はなく、前期・後期と年2回、当館の多彩な収蔵資料を作家や作品毎に、企画性のあるテーマで展示するコレクション展を展開しています。

明治・大正・昭和と、今は昔となりゆく作品も、見方を変えると現在を生きる私たちと地続きの時間軸上にあり、その作品を生み出した作家が確かに存在したということを体感的に鑑賞できる展示を目指して、日々展示活動に取り組んでいます。

学芸員の業務は多岐にわたりますが、私がこれまで携わってきた展覧会業務の一例では、当館収蔵資料品展であるコレクション展「綴じられた時間の物語—ムットーニのからくり文学

館」、「下北沢猫町散歩」、企画展では「安野モヨコ展」「原田治展」「小松左京展」、昨年度は企画展「石黒亜矢子展 ばけものぞろぞろ ばけねこぞろぞろ」、今年度は「伊藤潤二展 誘惑」「漫画家・森薫と入江亜季 展」を担当しました。

後者3つの企画展は、全国巡回を見据えて、新聞社や出版社との共催企画として巡回パッケージの基礎となるコンセプトづくりから携わりました。当館は全国巡回の立ち上げ館の仕事を担うことも多く、デザインや展示点数など巡回を考慮した内容を考える部分もちろんありますが、当館にしかできない「世田谷文学館らしさ」という面も大切にしながら企画に取り組んでいます。また、近年では現役作家の方の展覧会を開催させていただくことも多く、展示へのご意向を最大限反映できるよう、作家と密にコミュニケーションをとりながら準備を進めています。展示はただ空間を作るだけでなく、作品の特性（絵本作品であれば絵本としての見せ方など）を重視した展示方法や会場デザイン、解説パネルの書き方や分量を意識して開幕準備にあたっています。

学生時代の学び

子どもの頃から絵を描くことや物を作ることが好きで、美大へ進学したいと考えていました。その後、ミッション系の中高に通ったことから宗教画に興味を沸き、絵に描かれた人物や



「石黒亜矢子展 ばけものぞろぞろ ばけねこぞろぞろ」
会場風景



「伊藤潤二展 誘惑」
会場風景

モチーフの組み合わせにはどんな意味があるのか。絵が描かれた歴史や背景などを考えることがまるで謎解きのようで、中学生ながらその奥深さにのめり込んでいったことをよく覚えています。絵の歴史や背景を勉強するにはどんな大学に行ったらよいのだろうか？そんなことを知り合いの美大の先生に相談したところ、「実践女子大学なら良い先生方がいる最適な環境だ」と教えていただき、実践女子大学の美学美術史学科へ入学しました。学部生時代は、児島薫先生のもと日本近代美術史を専攻。卒業論文では藤田嗣治（レオナルド・フジタ）による宗教画について研究し、大学院でも引き続き、藤田による宗教画の表現、特に聖母子像について研究していました。また、博物館学課程を受講していた学部生の頃より関心のあった、教育普及事業をより専門的に学びたいと思い、大学院在学中には、東京都美術館のアートコミュニケーション事業部にて1年間インターンとして企画展や普及事業の補佐に従事しました。

私はあまり要領が良い方ではなかったので、修士論文の執筆と、当時のインターン勤務先で準備中だった企画展業務などを平行していくことに四苦八苦することも多々ありました。しかし、展覧会準備のため、作家や資料借用先の他の博物館とのやり取りや、展示構成・会場デザインの検討、図録の執筆やポスター制作の打ち合わせなど、〆ゼロから企画展を創る、ということを経験できたことは何物にも代えがたい経験であったと思います。

学芸員の仕事は教育普及である

学芸員としての業務には、企画展の準備やそれに付随する原稿執筆、収蔵資料の研究、新収蔵資料の調査、ワークショップの準備など、日々マルチタスクをこなしていくことも重要です。一方で、なにか「これは私にしかできない」という強みになることがあると、より自身の仕事にやりがいや楽しさを見いだせるのではないかと思います。私の場合は、よく世田谷の下北沢の街を歩いて、独立系書店やレコード店などを見て回り、気になる装丁の本や雑貨を見つけたり、舞台や音楽のワークショップをしているアーティストと話したりすることが企画展のアイデアやワークショップに生かせる新たな視点につながる事が多く、仕事をするうえでとても大切なプロセスになっています。

博物館の基本業務である「展示」「収集・保管」「調査研究」は、どれもが不可欠で、これらが相互に作用することが最終的に「教育普及」につながると思います。研究し、わかったことを成果として展覧会で発表する。多くの人に展示を見て知ってもらい、成果を持ち帰っていただく。この展示活動そのものが最大の教育普及事業なのではないでしょうか。これから学芸員を目指す方がもしこのテキストを読んでくださっているのなら、ぜひいろいろな地域や時代、文化、分野、活動に興味関心を持ち、自身の強みを見つけてみてください。きっとあなたの支えとなるはずです。

2024年度 博物館実習先一覧

2024年度は、下記の博物館・美術館に実習を依頼しました。
関係諸機関およびご担当いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

(都道府県別・五十音順)

都道府県	館 名	実 習 生
神奈川	神 奈 川 県 立 歴 史 博 物 館	1名
	箱 根 彫 刻 の 森 美 術 館	1名
	平 塚 市 美 術 館	1名
	横 浜 市 歴 史 博 物 館	1名
群馬	群 馬 県 立 近 代 美 術 館	1名
	高 崎 市 タ ワ ー 美 術 館	1名
埼玉	川 越 市 立 美 術 館	1名
	埼 玉 県 立 近 代 美 術 館	1名
	狭 山 市 立 博 物 館	1名
千葉	千 葉 市 美 術 館	1名
東京	荒 川 ふ る さ と 文 化 館	1名
	江戸東京博物館（江戸東京たてもの園）	1名
	新 宿 区 立 新 宿 歴 史 博 物 館	1名
	世 田 谷 美 術 館	1名
	台 東 区 立 書 道 博 物 館	1名
	戸 栗 美 術 館	1名
	日 本 民 藝 館	1名
	練 馬 区 立 美 術 館	1名
	八 王 子 市 夢 美 術 館	1名
	府 中 市 郷 土 の 森 博 物 館	1名
	町 田 市 立 国 際 版 画 美 術 館	1名
	弥 生 美 術 館	1名
栃木	足 利 市 立 美 術 館	1名
長崎	長 崎 県 美 術 館	1名
長野	松 本 市 美 術 館	1名
福島	郡 山 市 立 美 術 館	1名
山梨	山 梨 県 立 美 術 館	1名
学内	香 雪 記 念 資 料 館	11名
	実 習 生 総 数	38名

群馬県立
近代美術館

美学美術史学科4年

第1日目 7月30日(火)

午前9時30分に美術館内2階のシアターに集合した。教育普及担当の方と実習生9人が自己紹介を行ない、配布された日程表を元に、実習と最終日に発表する課題の説明を受けた。オリエンテーションが終わると、美術館の運営に関する座学が行なわれた。はじめに、美術館の設置根拠と役割について学んだ後、群馬県立近代美術館の運営と公立館としての課題、今後の美術館運営について教わった。次に、美術館の総務の仕事について、「ヒト」「モノ」「カネ」の視点から学んだ。県直営のため、県庁職員が総務を担当し、群馬県立歴史博物館と兼任している。また、収益性よりも利用者や地域社会への貢献を重視しているという。午後は、特別館長の講話を拝聴した。博物館学芸員資格の現状と、大学に博物館運営とキュレーターに関するコースを初めて設置したポール・J・サックスについて学んだ。次に、バックヤードを見学し、アトリエ、事務室、監視室、管理室、図書室、収蔵庫を見て回った。再度2階のシアターに戻り、教育普及とボランティアについて学んだ。教育普及活動では、作品の情報提供と鑑賞の手助けをする、活動が作品鑑賞に結びつく、来館者の年齢や状況によっては作品鑑賞を行なわない、の3つを活動の方針としている。活動は、展示に関連した活動、来館者の体験を伴う活動、学校・社会教育との連携事業、ボランティアの募集・育成に分かれている。教育事業で作成した教材「さいころパズル」は、さいころを組み合わせて絵を完成させる過程が、作品を観察することに繋がる。ボランティアは、自主的な意思の元で運営され、インフォメーションや学校見学、作品解説、ショップ運営、資料整理などを担当し、美術館にとって欠かせない存在となっている。最後に明日の日程を確認し、1日目が終了した。

第2日目 7月31日(水)

9時30分に美術館内の2階シアターに集合した。午前は、学芸員の方による日本画・工芸の取り扱いについての座学を受け、収蔵庫の見学を行なった。日本美術には様々な形態の作品が存在し、作品に合った展示と保存が重要であると学んだ。その後、収蔵庫で実際の保存方法を見学した。掛軸や巻子は木製の棚に置き、屏風は引き出し式の木枠に垂直に立て、さらして固定していた。染色作品は筆筒に納められている。また、収蔵庫の二重扉は、開くと同時に圧力の差を利用して内部の空気を外に流し、外気の侵入を防止していると説明を受けた。午後は、学芸活動について学んだ。2014年7月19日から8月31日に群馬県立館林美術館で開催されていた「夏休み！いきもの図鑑」が出来るまでの過程を説明していただいた。作品の選定から、図録やチケットの作成、教育普及の企画、展示作業までの流れを学んだ。その後、広報作業を行なった。次回の展覧会に向けた郵送物3種類を封筒に入れ、チラシを50枚ごとに分けた。最後に課題作成を行ない、2日目が終了した。

第3日目 8月1日(木)

9時30分に美術館内2階のシアターに集合した。午前は油彩画と版画等の取り扱いについての座学を受け、収蔵庫の見学を行

なった。油彩画の調書作成においては、絵具を「物」として観察することで、客観的な記録を残せると学んだ。また、版画は酸化しやすいため、中性を保つことが重要であると学んだ。その後、収蔵庫内を見学した。油彩画はレールで吊り下げられた網目状の壁面にS字フックを使用して掛けられている。地震発生の際に、適度に揺れることで、作品の落下が防がれるため、ストッパーは掛けない。次に、前室で油彩画の点検と版画額の構造を見学した。貸し出す予定の油彩画に対し、ライトを様々な角度から当て、絵具の亀裂や剥落を確認した。版画を保存する際は、窓マットと台マットを白麻のガムテープで繋ぎ、台マットにテープで作品を固定する。薄葉紙と一緒に挟み、アーカイバルボードの箱に入れる。額装する際は、アクリル、マットに挟んだ作品、調湿紙、アーカイバルボード、プラボード、蓋の順に入れる。午後はアトリエに移動し、夏休みに開催される「こども+おとな+夏の美術館」の「ふしぎな植物をかこう」というワークショップの実習を行なった。水で溶いた絵具をはがきサイズの画用紙に垂らし、ストローで吹いて植物を描く。実習生自らが体験した後、ワークショップに来たお客様にやり方の説明を行なった。最後に課題作成と課題の中間発表を行ない、3日目が終了した。

第4日目 8月2日(金)

9時30分に美術館内2階のシアターに集合した。午前は先ずコレクション展示と企画展示を鑑賞した。次長兼学芸係長が解説してくださり、新収蔵作品が収蔵された経緯や、7つあるコレクション展示室の特徴の説明を受けた。天井高が高く、面積の広い展示室3では、規模の大きさに耐えられる作品でなければ展示が難しいと学んだ。企画展示では、鑑賞者を飽きさせないため、壁紙の色を変えている。次に、隣の群馬県立歴史博物館の常設展示とバックヤードを見学した。現代の作品やコレクションは、キャプション作成や展示の際、戦争や個人情報、持ち主のご子息などが関わるため、細心の注意を払うと伺った。展示の見学後、バックヤードを見学した。収蔵庫の基本的な構造は美術館と同じであり、収蔵庫前の前室とガスによる消火設備があり、温湿度が管理されている。木製の棚は摩擦によって、金属の棚にはベルトの取り付けによって、地震による落下が防止されている。一方、博物館には燻蒸室があり、燻蒸作業の際には外部の専門家が操作するという。午後は図書室に移動し、3班に分かれて図書整理を行なった。私の班は、図録の整理と本の移動を行なった。図録のラベルを元に、作家の名前と展覧会の開催年月順に配架した。また、本棚の空きを増やすため、数十冊を特別館長室に移動させた。最後に課題発表についての説明を受け、4日目が終了した。

第5日目 8月3日(土)

9時30分に美術館内2階のシアターに集合した。午前は課題の作成を行なった。課題は、コレクション展示プランの作成と、コレクションを利用した教育普及プログラムの作成をすることだ。展覧会のテーマや意図の説明文と、作品リスト、教育普及プログラムの説明の3点を提出した。午後は1人10分程度の課題発表と質疑応答を行なった。私は様々な観点から涼しさを感じられる作品を展示し、粘土で作品を作るワークショップを考えた。質疑応答では、ワークショップに加えてワークシートを作成し、作品鑑賞の手助けを行なうと良いという意見をいただいた。私が作成したプランは感受性が求められるものであったため、ワークシートが有効であると気が付かれた。また、利用者に寄り添う姿勢が足りていないことを反省した。展覧会のテーマによって、有効な教育普及プログラムは異なり、利用者の立場に立ってプログラムを考えることが重要だと感じた。最後に実習の総括を行ない、5日目が終了した。

博物館実習報告

埼玉県立
近代美術館

美学美術史学科4年

第1日目 7月16日(火)

10時に3階の講座室に集合。学芸員の方と実習生で自己紹介を行ってから、館内施設見学に移り、3階から地下一階、屋外までを歩きながら説明していただいた。作品保護のための空調設備や、災害時には避難所になる公園内の美術館として、来館者を守る災害対策の大切さについて学んだ。その後講座室に戻り、学芸部の仕事について説明していただいた。作品収集、管理保存、展示活動、調査研究、普及活動を行なう上で欠かせない費用面などについて学び、県立の美術館として市民に納得される作品収集には様々な困難があることを知ることができた。お昼休憩後は、企画展の概要について説明していただいた。自主企画展と共同企画展の違いについて、また近年、埼玉県立近代美術館では企画展の中でコレクションをいかに有効に展示するかについて重視しており、現代作家や女性作家などの展覧会も積極的に開催していることについて学んだ。その後は総務・管理の仕事について説明していただき、多様なスキルを持つ職員、人材が協力し合い前に進むことで、美術館の魅力が最大限発揮できることを学んだ。最後に、これまで作家の全体像がまとめられた書籍がなかった吉田克朗の展覧会を企画し実施するにあたっての困難や、図録作成の責任の重さについての話を伺うことができた。

第2日目 7月17日(水)

はじめに図書館司書の方から図書の取り扱い、利用方法について説明していただき、図書数に対して保管場所が足りておらず、地震など災害時にはやや危険な状態で保管している図書もあることや、検索サービスのやり方について学んだ。その後実際に資料閲覧室にて図書の整理を行ない、司書の仕事の大変さを実感した。午後はコレクションについて説明していただき、埼玉県立近代美術館の特徴であるデザイン椅子の設置に至る経緯などについて学ぶことができた。その後、収蔵庫に移動し油彩画の保存状況を見学。作品情報や作品についている傷の情報が書かれた作品カードを用いて作品点検を行ない、ライトで作品を照らしながら新たな傷がないか確認した。

第3日目 7月18日(木)

講座室にて、彫刻作品の取り扱いが素材によってどのように異なるか、また屋外の彫刻作品を保存するにあたって行なっている活動について学んだ。埼玉県立近代美術館では、屋外彫刻作品を市民の方に大切に扱ってもらうため、彫刻洗浄プログラム「彫刻あらいぐま」を行なっている。親子で彫刻洗浄をすることで作品を大切にする心を育むことができると感じた。その後屋外彫刻のメンテナンスを4人のグループで行なった。水、洗剤、スポンジ、雑巾を用いて彫刻作品を洗浄しながら傷や落書きなどがないかを確認し、泥や虫の巣などを除去することができた。午後は版画・写真の取り扱いと、教育普及活動について説明していただいた。実際に子供向け鑑賞会と大人向け鑑賞会を体験することで、異なる年代に対する美術教育の違いを学ぶことができた。また、4人で1グループとなり、作品が描かれたカードを2枚同時にめくり、学芸員の方の質問に当てはまる方のカードを指差し、その理由を言い合うゲームを行なうなかで、子供に対しての美術教育は、一方的に話を聴かせるのではなく、楽しみながら学べることで

大切だと感じた。

第4日目 7月19日(金)

講座室にて日本画の取り扱いについて学んだのち、収蔵庫に移動し日本画を壁に掛ける練習を行った。劣化していく作品を安全に展示するために気をつけなければならないことや、ウォールケースを用いた展示方法が最適だが全ての作品でそれはできないため、組み立て式やレンタルなどを用いて工夫していることなどを学んだ。午後は講座室にて、広告予算が0円のなかで広報と刊行物をどのように広めているかについてお話ししていただき、実習生からも埼玉県立近代美術館を若者に広めるためにどのような方法があるか意見を出した。その後は、視覚障害者のためのガイドについてご説明いただき、触図を使ったガイドを行なうなど、埼玉県立近代美術館はどんな人の利用も妨げない姿勢をもっていることを学んだ。最後に館長の建畠哲さんから、これからの美術館についてお話しいただき、コロナ禍が及ぼした美術館への影響や、近代美術館としてどのような作品を収集していくべきなのかについて学ぶことができた。

第5日目 8月8日(木)

5日目から個別実習が始まり、他大学の方とペアになり活動した。はじめに資料閲覧室で、図録を送る美術館の電話番号を『全国美術館会議会員名簿』を元に調べ、エクセルに入力した。私は名簿を元に調べる作業を行い、ペアの方には入力を行ってもらった。分担当業により予定よりも早く終わらせることができた。午後は収蔵庫と屋外で彫刻の所在場所確認を行なった。紙のリストと異なる場所にある場合などはリストにその旨を記入し、作品についているタグの情報と紙のリストにある情報が異なる時はその場で正しい情報を調べ、異なっている方を修正した。最後に、常設展、企画展をペアの方と一緒に見て周り、互いに意見を言いながら鑑賞することで作品理解を深めた。

第6日目 8月14日(水)

はじめにレターパックに図録を入れる作業を、学芸員の方と実習生10人ほどで行なった。図録は3種類あり、美術館によって送付数が異なるため、間違えないよう集中しながら作業を行い予定通りの時間内に終えることができた。100館近い美術館に送るためかなりの力仕事だったが、やり終えた時には達成感があつた。午後は創作室にて視覚障害者の方のガイドに使用する触図の作成を行なった。作品を立体的に触れるようにするため、絵画のコピーを元に遠景から近景にかけて発泡シートが盛り上がるようにし、人物の頭や猫には毛糸を使用した。触図を利用した方が少しでも作品を理解しやすくなるよう、学芸員の方、そしてペアの方と相談しながら作業を行ない、毛糸の質感や輪郭線につける糸など細部にもこだわった。

第7日目 8月15日(金)

最終日は学芸員の方と一対一で実習を行なった。はじめに資料閲覧室で、約1年後に開催予定の、野島康三と斎藤与里の企画展準備に必要な画像のトリミング作業をパソコンで行なった。午後は、斎藤与里の文献を自筆、他筆、その他に分類し、それをエクセルに入力する作業を行なった。文献を集める際は国立国会図書館のデジタルコレクションが便利であることを学び、自分も卒業論文を書くにあたって上手に利用していきたいと思った。その後は、斎藤与里と交友があった荻原守衛を専門とする磯山美術館の館報から、斎藤与里について書かれたページに付箋をつけ、コピーする作業を行なった。2人で館報を見たが、ページ数が多く必要な箇所を見落とさないようにしながらページを捲るとかなりの時間を要したが、展覧会を開催するまでの作業を実際に体験することができ、やりがいを感じた。

荒川ふるさと文化館

美学美術史学科4年

第1日目 6月27日(木)

9時半に事務所に集し、事務員・学芸員の方々に自己紹介をした後、オリエンテーションが行われた。文化館についての概要として、法的な位置づけや設置目的、具体的な機能や事業について、学芸員の方から経験談を交えながらのお話を伺った。文化館は荒川区の文化財係が母体となっており、現在は博物館類似施設として生涯学習課の職員が業務にあたるのが法で定められている。また、文化館は荒川区民のために存在する施設であり、行政・区民から必要な施設だと思われるように事業を展開する必要がある。文化館の学芸員として、地域の動向に関心を持ち、現在の地域の課題を調査の中から探すことで、新たな企画展の切り口が見出せる、というお話が印象に残った。

午後は展示室と収蔵庫を見させていただいた。収蔵庫には、伝統工芸品・生活文化財・古写真など、様々な資料が保管されていた。特に区民から寄贈される生活文化財は、古く汚れたものも多く、収蔵前に入念にチェック・クリーニングをすることで、カビや害虫の侵入を防ぐことが重要であると教わった。

第2日目 7月4日(木)

午前中は、模擬展示の準備をした。文化館で展示を行なう想定で企画展を考え、企画書とレイアウト図を作成する。最終日には企画展示室をお借りして自作したキャプションと共に館蔵品を自分の手で展示し、発表するという課題だ。過去の企画展の図録からヒントを得ながら、模擬展示のテーマを考えた。

午後は資料整理について学んだ。文化館に資料が収蔵されるまでの工程を聞き、資料保存箱の作成と主に古写真を保管する中性紙封筒の袋書きを行なった。文化館は、生活文化財の寄贈・寄託が多く、具体的な制作年などがすぐにはわからない場合が多い。そのため、使用者の生没年を聞いておくと、後の調査の手掛かりになるという話を伺った。資料カードは、自分以外が見る可能性を考慮し、傷みがある部分は具体的に記載しておくことが重要だと学んだ。また、絵葉書になっている古写真の場合は、宛名面の書式によってある程度発行年代が特定できるという話を興味深く感じた。

第3日目 7月13日(土)

荒川総合スポーツセンターで行なわれた「あらかわの伝統技術展」に従事した。これは、荒川区内で活動する伝統工芸職人による展示・実演・販売や、ワークショップを行うイベントである。10時から太鼓の演奏会場の観客誘導、12時から会場の巡回・警備、13時から入口での資料配布、14時から学芸員による職人ツアーの記録写真撮影、15時から16時まで自転車誘導・整理を行なった。学芸員が、解説ツアーだけでなく会場の巡回や自転車整理まで行なっていることに驚いた。会場内は、職人ごとに置四枚ほどのブースが設けられ、職人の制作風景を間近で見たり直接作品に触れたりすることができるようになっていた。来場者は小学生から親子連れ、高齢者など幅広く、ワークショップに参加したり職人とお話ししたり、朗らかな雰囲気だった。会場の配置やワークショップの内容などは、荒川区伝統工芸技術保存会ひいては職人と協議しながら文化館の学芸員が調整すると伺った。普段見る機会が少ない、地域の技術や工芸品に直接触れるイベントがあることは、区民にとっても技術者にとっても、素晴らしいことだと感じた。墨や顔料の匂い、金属を叩く音や三味線の音が聞こえる会場が印象に残っている。

第4日目 7月18日(木)

午前・午後ともに模擬展示の準備を行なった。午前中は図録や図書、過去の館報などを見ながらテーマを考えた。午後には収蔵庫に入れていただき、どのような資料が収蔵されているか、各々のテーマの方向性に照らし合わせながら見せていただいた。私は浮世絵や伝統工芸品をテーマにしたいと考えていたで、文化館の事業の一環として購入した、荒川区登録指定無形文化財保持者の方が制作した、復刻浮世絵の版木と浮世絵を見せていただいた。浮世絵は額に納められ、版木は薄葉紙に包まれて保管されていた。また、区内の木版画彫師・摺師の方から文化館に送られ

る、摺りが施された年賀状も見せていただいた。そういった職人とのやり取りがあり、さらに資料として保管していることに驚いたと同時に、区民・職人との関係性の構築の重要性を学んだ。

第5日目 8月7日(水)

午前中は、ワークショップ「俳句をつくろう！」に従事した。これは、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅に出たとき、荒川区にある千住大橋で矢立初めの句を詠んだことにちなんだイベントである。俳句の講師をお招きし、小学生を対象に行なわれた。まず文化館で参加者からスタッフまで全員俳号を作り、名札を付けた。学芸員が教室の流れを説明し、奥の細道について解説した。その後隣にある素戔鳴神社に移動し、30分ほど境内で俳句づくりのための季語探しを行なった。屋外で行動中は、参加者がはぐれたり怪我をしないように気を配りながら、桃の実に触れることを促したり蝉の抜け殻を探したりして参加者を誘導した。文化館に戻って参加者に俳句を作ってもらい、できた作品を大きな短冊に書き写して壁に貼り出した。講師の方の講評の後、色紙に俳句と絵を描いてもらった。博物館でありながら、俳句をテーマにしたイベントがあることは意外だった。また、近隣にある神社を活用した企画内容は、文化館の立地を活かしたものだと感じた。

午後は模擬展示の準備をした。テーマを決定し、図録から取り上げた展示品をリストアップし、展示の章立てを考えた。

第6日目 8月16日(金)

台風の影響により中止になった。午前中は資料調査についての講義を受け、午後は模擬展示の準備を行なう予定だった。

第7日目 8月18日(日)

午前・午後を通してワークショップ「勾玉を作ろう！」に従事した。区内の遺跡から縄文時代のものが発掘されたことにちなんだイベントだ。まず会場の設置と材料・道具の配置を行ない、開始時刻前には、実習生にも一つずつ滑石をいただき、少し作業工程を教わった。イベント開始後は、勾玉や荒川区で発掘されたものについて学芸員が解説し、作業が開始された。参加者の様子を窺いながら、事前に聞いた作業のコツを伝えた。作業中、学芸員の方が参加者の作品に手を加えるとき「触ってもいいかな？」少し形整えてもいいかな？」と参加者に優しく了承を取っていた場面が印象に残っている。学芸員の方の、区内の小学生向けのイベント運営の経験を垣間見た。参加者の保護者もそれぞれ作業に関わっており、各家庭のコミュニケーションの場にもなっていた。完成後、勾玉を紐に通して首飾りにしたとき、参加者の嬉しそうな様子が印象深かった。

第8日目 8月22日(木)

午前中は模擬展示検討会の準備として、作成してきた企画書・レイアウト図を学芸員の方に見てもらい、修正を加えた。事前に文化館が所有する展示ケースの寸法についてのプリントが配布されていたが、実際のサイズ感がよくわからず、会場いっぱいケースを詰め込んでしまったことを指摘され、レイアウト図を一部修正した。

午後は、検討会を行なった。学芸員全員の前で企画書とレイアウト図について発表した。やはり展示品を詰め込みすぎている部分と、一部の章の見せ方について、指摘をいただいた。実習生の企画について、学芸員が自由に意見や感想を伝え合っており、実際の企画展の話し合いの空気を感じることができた。「終盤に文字の多いパネルを出しても、読み飛ばされることが多い。予算自由という設定なのだから、壁付けテレビで動画を流したらどうか」という、具体的な経験に基づく自由な発想に驚いたと同時に、普段課される予算の壁を感じた。

第9日目 9月5日(木)

午前中は模擬展示発表の準備を行なった。作成してきたキャプションをパネルに貼る作業を行ない、企画展示室の展示ケースに館蔵品を展示した。私は、浮世絵制作の手順を提示する目的で、復刻浮世絵の版木5枚を展示させていただいた。版木の実物を手に取って間近で見たのは初めてで、精緻な彫りに感銘を受けた。

午後は事務員・学芸員の方々をお呼びし、発表会を行なった。キャプションの大きさと展示品とキャプションの配置のバランスなど、具体的な指摘をいただいた。複数の版木を横に並べて展示したことにについて、「こういった展示はしたことがないので、今後の参考にしてみたい」と言っていたのが嬉しかった。

日数が長く大変だったが、イベントや模擬展示など、たくさんを経験させていただいた。毎回担当してくださる学芸員は違っていたが、どの方々とも親身にお話やアドバイスをしてくださり、丁寧に指導していただいた。地元の資料館についての理解が深まったと同時に、学芸員の仕事について学ぶことができ、実習を受けられてよかったと感じた。

博物館実習報告

江戸東京たてもの園

美術史学専攻博士前期課程2年

第1日目 8月27日(火)

実習初日は今後パソコンを使用する機会があるため、まず館の情報セキュリティについて学んだ。情報の保管方法や、取り扱う際の意識など、情報の取り扱い方を学んだことに始まり、この日は一日を通して講義が行なわれた。現在休館中である江戸東京博物館の分館としてたてもの園での実習を行なっているため、午前中の講義は江戸東京博物館の概要や展示についてであった。江戸東京博物館勤務の方々からお話を伺い、江戸博の設立概要と今後の課題を学んだ。課題としては収蔵庫問題、増え続ける東京の記録を既存の展示からどう拡張して展示範囲を広げるか、研究環境をどう確保するかが挙げられた。そこから次の講義で常設展運営の見所を改めて確認し、研究成果還元型の展示から資料や模型をより活用した来館者ニーズ重視型へ改装しているというお話を伺った。資料の活用方法をここで学んだ後に、その収集方法と保管について学んだ。購入にあたり税金を資金源とする場合、適切であるか、都民へしっかりと還元できるかについて検討を重ねる必要があることや、価格の相場と購入先の提示する価格を確認した後、都の鑑定士の価格も揃えて資料収蔵委員会という都が主催する機関での承認を得て初めて資料の正式な受入や燻蒸等の管理が始められるという流れを学んだ。江戸博では資料情報管理システムというデータベースを用いて資料と棚にバーコードを付与し、何がどこに収蔵されているのかリアルタイムで反映される管理方法を活用しているという。次にたてもの園発足の概要、たてもの園の根幹であるたてものを移築する方法、意味、そして居住から展示へと目的が変化することによるたてもの機能の変更などを学び、一日を通して江戸博とたてもの園の概要を学習した。

第2日目 8月28日(水)

実習2日目はたてもの園のこれまでの普及事業を担当者に講義していただき、館の特徴を学んだ。その後5人程度のグループを四季に分け、たてもの園の新たな催事を考えるグループワークを行なった。私のグループは夏を担当することになり、まず夏に何ができるか、来館者ニーズ等を考えてから実際に園内を視察し、どのたてもので何ができるか確認した。そこでターゲットを地域の方々に絞り、暑さを避けた朝夕にイベントを設定し「朝活・夕活」を押し出した「朝夕納涼たてもの園」というイベントを企画した。早朝にたてもの園でヨガを行なったり朝食を取ったりして、夕方に再度来園してもらって夏の怪談や夜のたてもの園の光を鑑賞するという、夏にたてもの園で快適に楽しむことを目的とした内容である。講評では朝活という視点や、若い層・健康へ気を遣っている新しい層へのアプローチができている点が好印象であるものの、ワークショップで制作したものを自由研究にできるという視点から開催時期をもっと早くても良いのではないか、また明確に利益がでる特典を付けるとクレームの種になりやすいため、たてもの園の朝夕の変化を楽しむ等の自然な流れを作れると良かった等のご指摘を頂いた。現場で活躍している方々からフィードバックを頂けたことで、理想論ではなくより現実的に即した学びを得ることができた。

第3日目 8月29日(木)

実習3日目は明日から始まる展覧会を企画する課題に向けて、展覧会のつくり方を学んだ。展覧会の収支構造をお話いただき、収支が釣り合うような展覧会と、民間企業との共催であるために収益性の求められる展覧会があると学び、自分の展示がどちらかを考えて企画する必要があるのだと考えた。午後からは資料の扱い方を実物で学び、掛け軸は会議室で、卷子は西川家別邸の和室で実習した。卷子の際は卦算を用いたり、借用時にお家へ伺った際の状況と近い環境や体勢で学ぶことができたりなど、非常に貴重な経験であった。

第4日目 8月30日(金)

台風の影響が昨日から心配されていたが、雨が多少強い程度で実習は問題なく行なうことができた。最終日の展覧会発表に向けて、自分の担当する資料のカード作成や資料の写真撮影を行なった。収蔵庫に簡易の写場を作っていただき、カメラの説明を確認した後順番で撮影を開始した。資料を真横から撮影するのではなく、上から見下ろして撮影する館もあるのだと初めて知った。収蔵庫は二重扉で、入り口で靴下のゴミを取るシートに乗った後スリッパに履き替えた。庫内は湿度60度、温度20度に保たれており、撮影が終わる頃には少し肌寒く感じる程で、資料の管理にどれだけの注意と意識が注がれているのか実感した。また、棚や資料にバーコードが付与されている、館の特徴も実見できた。その後資料を確認しながら資料カードを作成し、キャプション作成についての説明を受けた。翻訳文などの挿入のため情報の取捨選択が必要であり、自分の裁量にかかるため慎重な検討をするべきであると学んだ。

第5日目 9月2日(月)

土日をかけて展覧会基本計画案シートとチラシ、キャプションを作成し出力してきたため、用紙をハレバネに貼って展示情報としての正式なキャプションを作成した。その後サイコロと呼ばれる展示具をそれぞれ収蔵庫で選択し、それらを用いてどういった角度で展示するか検討した後、展示作業中にぶつかる等のトラブルを避ける空間確保のため、2グループに分かれて作業を行なった。担当する資料の矢立が黒いためサイコロを白で統一し、鑑賞者の導線を確認し、一番見せたい部分、柄の部分の文様と墨壺の中へまず目が行くような向きで資料をサイコロへ立てかけた。当初蓋を薄葉紙で包んだし字アクリルパネルへ載せていたが、サイズが大きすぎて資料の邪魔をしていたため、小さめのアクリルブロックを用いることをご提案いただき、サイコロを変更した。またそのままでは資料が不安定になるため、館の方にご助言いただきながらテグスで資料を固定した。何度やってもテグスが緩んでしまい、普段見ている展示は熟練の技によって完成されていたことに気がついた。

第6日目 9月3日(火)

最終日は実習生全員の展覧会発表と、展示講評を行なった。それぞれ個性のある展示内容やチラシが並び、非常に興味深かった。講評では「チラシやポスター1枚でどうやって行きたいと思わせるかという工夫が必要」という言葉が印象に残った。タイトルで展覧会に何があるのかを開示することや、反対にチラシで何が展示されているのだらうと思わせて裏面を確認させる技術が求められ、広報の最重要部分であるチラシ・ポスターデザインは非常に力量を必要とするのだと実感できた時間であった。自分の発表ではキャッチコピーと章立てに相違が見られるのご指摘いただき、趣旨概要と章立てがきちんとリンクしていないと展覧会の説得力が無くなり企画が通らないのだと身を以て実感したため、その両方を逐次確認しながら企画を組み立てることが重要なのだと、発表とこれまでの講義を通して学んだ。

日本民藝館

美学美術史学科4年

第1日目 5月30日

9時30分集合、朝礼ののち実習期間別の3班に分かれ、清掃を行なった。自分が所属するB班は外回りを担当し、西館前、玄関、庭を清掃した。10時からは柳宗悦と日本民藝館についての講義を受けた。民藝館の沿革や、創始者である柳と民藝運動についての概要を聞いた。11時からは収蔵品の扱いと管理について教わった。ミュージアムIPMについて映像を交えて説明を受けた。日本民藝館の建物の構造は、外気や外光をある程度許容する形になっている。そのような環境で所蔵品をどう守るか、考えながら実習に取り組む必要があることを理解した。収蔵品の取り扱いについても説明を受け、四方左掛けの練習をした。午後からは日本民藝館の収蔵品と展示について講義を受けた。展示室を見学し、館内を見ながら部屋ごとの特徴や展示ケースの構造などについて説明を受けた。講義終了後、グループワークの発表の準備を行ない、実習ノートを記入してから退館した。

第2日目 5月31日

9時30分集合、朝礼ののち清掃を行なった。本日は雨のため、本館の展示室を清掃した。10時から本館の各展示室とバックヤードを見学し、展示、収蔵場所の説明を受けた。その後日本民藝館の管理運営について講義を受けた。組織や事業概要、運営の方法について教わった。11時からは学芸員の役割について講義を受けた。学芸員としての働き方や、民藝館にゆかりのある資料を紹介していただいた。午後は広報と教育普及について講義を受けた。集客の現状と展望、近隣の学校との連携などについて教わった。その後、グループワークとして中学生に向けた鑑賞ガイドの制作と提案を行なった。講義で伝えられたことをもとに、日本民藝館らしさ、情報の伝わりやすさを意識してガイドを作成した。15時に退館した。

第3日目 6月1日

9時30分集合、朝礼ののち外回りの清掃を行なった。10時から西館を見学させていただいた。西館は柳の元邸宅であり、普段見ることのできない台所や納戸まで見ることができた。その後、日本民藝協会の仕事と役割について講義を受けた。日本民藝協会とは、雑誌『民藝』を出版する組織である。民藝運動の全盛期から活動を継続しており、各地の民藝協会との関わりについても教わった。11時からは学芸員の方に質疑応答の時間をとっていただいた。実習生に対して誠実に向き合っていただき、貴重なお話を伺うことができた。午後からは館や柳について語る動画「日本民藝館物語」を鑑賞した。14時30分に講義が終了した。実習ノートを記入し、前期の実習を終えた。

第4日目 8月27日

後期の実習を開始。日本民藝館は本日より展示替え期間として閉館している。B班はそれまで開催されていた「柳宗悦と朝鮮民族博物館」展の搬出・片付け作業と、次回の「芹沢銈介の世界」展の搬入作業を行なう。日本民藝館では朝礼、昼休憩、お茶休憩、終礼の時間に銅鑼を鳴らして合図するが、実習期間中は実習生が担当する。それぞれ時間を確認し、持ち回りで銅鑼を鳴らすことになった。9時30分集合、雑誌『民藝』の搬入作業を行なった。10時から展示の撤収作業を開始した。キャプションを回収した後、2階展示室の木彫作品を搬出し、不織布で埃を拭いた。その後、1階の収蔵庫まで所蔵品を一つ一つ運んだ。午後にか

て、大展示室に展示されていた陶器の搬出を行なった。作品をケースから運び出し、マットの上に置いた。それを不織布で拭いたのち、桐箱に入れ、四方左掛けで収納した。桐箱に入れた作品は、2階収蔵庫まで運んだ。その後展示台や大型の収蔵品の搬出を行なった。15時30分からはお茶の時間があり、本日は自分ともう一人準備と後片付けを担当した。17時30分に退館した。

第5日目 8月28日

9時30分集合。朝礼ののち、展示ケースを磨いた。その後、次回の展示で使用する資料をいくつか搬入した。西館の倉庫に木彫作品が収蔵されているが、西館は道路を挟んで本館の向かいにあるため、道路を渡って運ぶ必要があった。午後からはやきものの搬出を行なった。地下の収蔵庫からエレベーターを利用し、1階まで運んだ。お茶休憩ののち、売店で販売する商品のラベルシールを貼った。その間、学芸員の方の声かけに従って適宜搬入作業をした。17時30分に退館した。

第6日目 8月29日

9時30分集合、朝礼。1階収蔵庫から2階に木彫品の搬入を行なった。その後、額装作品の展示作業を手伝った。11時から中庭の清掃を行なった。午後からは、1階の展示計画を行なった。冊子状の作品を展示するため、実習生同士でどこにどの作品を配置するか相談し、実際に展示作業をさせていただいた。本立てや展示台を利用しながら、日本民藝館らしい美しい展示を目指した。実際の展示では学芸員による展示に修正されるが、実際に作品を使用して展示構成を考える機会は貴重であり、大変充実感があった。17時30分に退館した。

第7日目 8月30日

9時30分集合、朝礼。売店で販売する商品のラベルシールを貼った。その後キャプションの札を探し、展示ケースに入れる作業を行なった。日本民藝館では、小さい木札に作品の概要が書かれたキャプションを使用している。キャプションは項目ごとにファイリングされており、作品の所蔵番号を確認してファイルから探す作業を行なった。一部キャプションのないものや、新たに作り直す必要のあるものをチェックした。本日はお茶の準備を担当した。キャプションの準備を続け、17時30分に退館した。

第8日目 8月31日

9時30分集合、朝礼。和紙によって作成された作品を展示するための土台を作成した。紙の作品は薄く繊細であるため、展示ケースに直接置かず、間に緩衝材を入れる必要がある。作品の大きさを計測し、それに合わせて厚紙を切った。それに和紙を貼り合わせ、土台を作成した。のぞきケースに作成した土台を入れ、その上に紙の作品を展示した。その後、展示に使用する衣桁を運んだ。午後はキャプションの札を探し、展示ケースに入れる作業を行なった。17時30分に退館した。

第9日目 9月3日

9時30分集合、朝礼。やきものの搬出を行なった。搬入が完了した部屋から掃除を行なった。中庭のガラス窓を清掃した。空き時間に企画展示室の作業を見学した。

第10日目 9月4日

9時30分集合、朝礼。1日かけて館内の照明を調整した。作業は梯子に登ってスポットライトを動かす人、梯子を支える人、スポットライトの明るさをボタンで操作する人、照度を計る人、決定した照度と位置を記録する人に分かれて行なった。作品に当たる照度はスポットライトの位置、明るさ、絞りから決定され、周りの照明の影響も受ける。作品を保護しながら視認性を高めるため、何度も調整を重ねる必要がある。特に、日本民藝館では棚の中に複数の作品を並べて展示することが多いため、それぞれの作品が同じ程度の照度になるようにも考慮する必要がある。廊下の掃除なども行ない、実習を終了した。17時30分に退館した。

博物館実習報告

実践女子大学
香雪記念資料館

美学美術史学科4年

第1日目 7月17日(水)

実習初日は、10時30分に1階プレゼンテーションルームに集合し、実習を行なう上での注意事項や香雪記念資料館の大まかな基本情報を学ぶことから始まった。香雪記念資料館では女性画家研究、女性による芸術・文化活動についての研究を重視しており、主な学芸員の仕事内容としては「女性画家の作品調査・研究」「女性画家の資料の収集・保管・展示」「調査報告・発表」「教育普及」の4点が挙げられる。「戦後の女性画家たち」展を例に出品交渉やリスト・図面の作成、展示準備、広報物の作成など実際に展覧会を行なう上で学芸員がどのような業務を行なっているのか一連の流れを学ぶことができた。バックヤード見学では温湿度の調整や虫対策、地震対策など展示室や倉庫、収蔵庫の各所で環境や作品に応じた対策が日々行なわれており、さらに清掃・点検によって清潔な環境が保たれていることで作品を保護し、長期保存できるように常日頃から対策されていることを学んだ。

午後は掛軸の取り扱い・展示・調書について学んだ。去年の実習の授業で学んだ掛軸の設置に加えて、今回の実習では実際に展示を行なう時と同様に作品の間隔を等間隔に設置し、アイレベル（床から140cm）に合わせて作品の高さを調整する方法を学んだことで、見やすい展示作りや実際の展示方法についてより知識を深めることができた。

第2日目 7月18日(木)

10時30分に1階プレゼンテーションルームに集合し、午前中はコンディションチェックの方法と展示解説の方法について学んだ。コンディションチェックを行なう際は、収蔵庫内など窓がないところで行ない、側光線という道具を使い、作品の横からライトを当てることで作品の凹凸などを見て、ウキや剥落、亀裂などを確認する。実際に掛軸でコンディションチェックを行ない、表具のウキを確認し、掛軸の裏面に染みがないかなど、どのような視点を持って学芸員がコンディションチェックを行なっているのかを知ることができた。展示解説の方法では、言葉による解説、写真や図版による解説、人による解説のほかに展示で設置されるパネルの種類など、実際の美術館を例にどのような効果や目的があるのかを学んだ。

午後はテグス張りの実習を行なった。はじめにテグス張りのメリットとして地震対策で落下防止の効果がある一方でデメリットとして鑑賞の妨げになったり、圧力によっては破損の恐れがあることを学んだ上で、実際に正方形の展示台を使って茶碗のテグス張りを行なった。口の薄い部分に圧力がかかると作品が削れる危険があるため、テグスが触れる部分にチューブを通して当てる方法で作業を行なった。ピンを展示台に打ち込む際やテグスを結ぶ際など手先を使った細かい作業が多くある中で常に作品を傷つけないように細心の注意を払って作業することが求められるため、今回は展示台のみで行なったが、実際に展示室内の展示ケースの中ではより難しく、繊細な作業が必要になることを実感できた。

最後に虫調査のため展示室にトラップを仕掛ける作業を見学し、実際にトラップに触れ、どのように調査を行なっているのか知る貴重な経験ができた。

第3日目 7月19日(金)

10時30分に1階学芸員室に集合し、学校から歩いて5分ほどの國學院大學博物館を訪れた。神道や考古学、民俗といった日本の歴史を扱う國學院大學博物館の展示と女性画家を中心に扱う香雪記念資料館は同じ大学博物館ではあるが、全く異なる展示であり、キャプションや解説パネル、作品の見せ方などの違いを発見し、比較することができたため大変勉強になった。

午後は美術館のコレクション形成について学んだ。香雪記念資料館では大学設置の資料館として学生の研究材料となるような作品の収集・公開を行なっており、コレクションの方針を定め、購入、寄贈によってコレクションが形成されていること、そして、調査・研究・保存・展示がコレクションの成長（収集）に繋がることを学んだ。

最後に解説パネルを作成する時間を頂き、これまで学んできた見やすい解説パネルのデザイン方法や午前中に鑑賞した國學院大學博物館のパネルを参考にしながらユニバーサルデザインになるよう試行錯誤し、実習3日目を終えた。

第4日目 7月22日(月)

10時30分に6階の60B教室に集合し、午前中は博物館における教育普及、博学連携について学んだ。ギャラリートークや講演会、ワークショップなどそれぞれの方法や教育普及の役割について学び、実際に実習の最終日で行なうギャラリートークに向けて、あいさつの言葉からギャラリートークを行なう際の注意点を詳しく学ぶことで情報を他者に正しく伝えるための話し方について新たに学ぶことができた。

午後は60A教室でパネルづくりの実習を行なった。パネルは展示に合わせて都度作成されており、できるだけ鑑賞の妨げにならないパネルを作成し、設置する場所に合わせたパネルづくりが行なわれていることを事前に学んだ後、実習が行なわれた。実際にパネルを作成したことで、パネルの側面をカッターで斜めに切ることで設置した時に壁にパネルの影が映らない工夫が施されていることなど普段美術館を鑑賞している時には気づけなかった細かい気配りに気づくことができた。

最後に完成したパネルを全員で鑑賞し、自分が作成するときには気づけなかった点にこだわってデザインしている人や、作品の世界観に合わせた色味やイラストをデザインに組み込んでいる人、実際に作品が使われている使用例を写真で参照して内容を補填している人など様々な工夫が見られ、勉強になった。

第5日目 7月23日(火)

10時30分に1階のプレゼンテーションルームに集合し、午前中は展示室の環境維持（温湿度管理、清掃、害虫対策）について学んだ。日々職員の方が作品の保存のために清掃や温湿度管理、害虫対策などを継続して行ない、常に予防を心掛けていることを学び、どのような点に気を付けて対策しているのか詳しく知ることができた。

午後は1階の展示室で作品を前にして実際にギャラリートークを行なった。ギャラリートークでは女性の日本画家について人物に焦点を当てて解説を行なった。作品について話す時間や、言葉を音で聞いて分かりやすい簡単な言葉に置き換える点、展示がない作品について触れるときは図版や参考画像を用意した方が分かりやすい解説となった点など、他の人の解説を聞くことで良い点や反省点に気づくことができた。ギャラリートークの難しさを感じる課題だったが、この課題を通じて、作品や作者の情報を分かりやすく、そして正しく伝える方法について理解を深めるきっかけとなった。最後にギャラリートークを行なう際にこだわった点や工夫した点、反省点などを発表し、多くの学びを得た5日間の博物館実習が終了した。

博物館實習報告

学生が記録した実習ノートの一部を紹介します。

実習記録

[illegible]

美学美術史学科4年 A.S
(箱根彫刻の森美術館)

実習記録

<p>実習場所 集会室</p>	<p>10月 10日(木) 天候 雨 晴ちり</p>
<p>内容 ①展覧会企画の考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会やワークショップの内容を自ら考え、それを基にポスターを制作する。 ・考えた内容: アール・ヌーヴォーに影響を受けた日本の作品についての展覧会 ・考えたワークショップ <ul style="list-style-type: none"> ↳ 展示した作品の図柄で消しゴムはん作) <p>図柄例: 鳥島武二『おたけ髪』など ↳ ぬり絵体験</p> <p>図柄例: 杉浦不水『三越呉服店 春の新柄図(左)』 藤島武二『明星』など</p>	<p>② 夢美術館で行われた展覧会のチラシ例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・陶酔のバリ・モネ・ムルト展 (2012年) ↳ 『シャ・ワフル』が当時どのように街中で貼られていたのかを再現したチラシ ・絵本原画展 きかんしゃトーマスとなかまたち (2015年) ↳ 車まで絵鑑に近く親る連木の利用者が多いことと想定し、チラシの裏面に美術館付近の駐車場マップを大きく記載 ・大正ロマン 昭和モダン展 (2013年) ↳ 着衣器での歌謡曲鑑賞やジズのミニシアターのイベント用に小さなフリーレットを作成
<p>③ 展覧会のアトリースについて (例: 小杉彩花展)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アトリースとは… メディアに向けた広報用資料 ・美術館について詳しくない人にもわかるように展覧会についての情報は、必要最低限の内容を記す。 ↳ 例: 開催要項・内容・トイベントについて お問い合わせ・作品の画像・画像使用の際の注意事項・チャージン ・送付方法: 郵送 (以前は主流だった) ↳ オプション (VRとiPad展示をマスコミニにメール等で送る) 	<p>④ 夢美術館の展示の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリジナル・ポップカルチャーの展示が多い。トビに「アトリー」が描かれた00展は、は行ずる。 ・『0000年の展覧会』を企画するようになっている。例) 高橋真寿の夢とロマン展 (2010年) ・安彦良和原画展 (2006年) ・温度計は、半暖式温度計を使用 ・展示ケースはケース内の空気と循環できるような工夫を聞いている。 ・チラシのデザインは、展示によって色々々になり依頼にも、特定のチャイプにはかなり頼らないようにしている。
<p>感想 自分で企画展やワークショップを考える演習について、石人に乗っかってもらうような企画を考えることの難しさ再認識した。アトリースについては、メディアに展覧会について深く知ってもらう報道してもらうのもあると今まで思っていたため、最低限の情報のみと伝えることを知り意外なことに感じた。また、夢美術館の様々な展示例を見て、展示の内容やイベントがどれも個性的で面白そうに感じた。特に大正ロマン 昭和モダン展では美術館内での演奏と聞くことができること、また、お絵かきの体験も楽しかった。</p>	

美学美術史学科 4 年 R.O
(八王子市夢美術館)

実習記録

7月 26日 (金) 天候 晴れ

実習場所 工作室、収蔵庫

内容 8:30 朝礼
9:00 ~ 考古学について
考古学の範囲
旧石器時代 35000年前 ~ 近現代
地中から掘りだすもの 府中市の文化見聞録
出土した土器なども、市の教育委員会の所蔵
預けてお蔵、公開する
収蔵庫見学
考古資料 工器や石の原料は湿度と温度に左右される
土器は、市民より寄贈された資料がほとんど
地震に備わらないうち、ひびで壊れたり、
カーテンのようなものを設置
デジタル
湿度が30%以下
刀に、さし入れ、矢じりなど 錆びたものは資料を収蔵
収蔵庫以外に、ガラスの容器には考古資料を保管
→ 場所以外にないため
また 収蔵資料の整理に 時間をとけない
→ 学芸員の業務が 70%に 落ちるもの → 課題

土器のかけらと照らしてもらう
想像してはいい
かけらは土器をつくる際にふきま
け、してもらう

10:00 ~ 8月3日の総工器づくりで使用する
コースター制作
柱に使う土器 土にコースター 底に模様がつく
つくりかた
7/27テーマで 格子状に制作
つくりかた
12:00 ~ 13:00 昼休憩
13:00 ~ 7月27日の昆虫標本づくりで使用する
道具制作
・ 9/20の土器の動きを見るキット
・ 交互に交互に
右に動かすのは左に動かす
左右交互に方向決まり行動
博物館では行なわず、キットで時5分
自分でやり、20分
・ 標本の白紙、昆虫針の用意
昆虫1匹につき
針5本
15x12cmの台座
11x11cmの山
木箱も大切だが、資料準備は、やり方などにも重要。

感想 本日は土曜日と日曜日に行なう 体験講座の準備が 主な実習内容だったため、
学芸員は展示などの業務以外にこのような講座の準備にも70%の時間をかけている
ことがわかった。収蔵庫見学の際には 資料を整理する 時間もなかなかとれないと仰さ
れたので印象に残っており、学芸員が 70%の業務に関わっていることが理解できた。

美学美術史学科 4 年 N.W
(府中市郷土の森博物館)

実習記録

[illegible]

美学美術史学科4年 J.T
(実践女子大学香雪記念資料館)

梱包実習報告

3年次の学内実習では毎年、ヤマト運輸株式会社東京美術品支店から、美術展覧会のための作品輸送に関わる専門の作業員を講師に招き、梱包実習を行なっています。

今年度は、最初に作業時の服装や身だしなみの大切さ、作品取り扱いの際の基本的な心構えについてお話しいただき、その後、実習を行ないました。薄葉紙や綿枕の扱い方を学んだあと、実際に仏像（手の部位）や陶器の梱包に取り組みました。



梱包實習報告

学生が記録したノートの一部を紹介します。

実習記録

[illegible]

美学美術史学科3年 (K.K)

実習記録

8月1日(木) 天候晴か

実習場所 実践女子大学70レゼンティョナルーム

① 梱包実習：仏像・茶碗・絵画の梱包方法について
内容★清潔な服装で、爪は短く、しゅかりチを洗った状態で作品を取り扱う。
★取り扱いの際は手袋を着用。移動させる際は両手で持つ。
※清潔な指の油分が付着したと落しとせぬものは手袋を用いる。

[薄葉紙] 美術品の梱包の際、日本で良く用いられる薄い紙。
光沢面肌表で、作品と取れる方向も必ず書面にする。
テープを使用して薄葉紙を裏に下紙で作品を紐で固定する。

[絹糸] 綿と2枚の薄葉紙で包んだもの。

[仏像(特)]
① 薄葉紙をクワシヤにて横傾斜とし、それを仏像の手の前が少し大きき位置の大きさで巻を整える。これを2つ作る。
② 手の平の裏の前の上に上下をはさむ。
③ 手のひらの隙間を埋めるために入れた薄葉紙をはき込む。
④ 手首側はきつく、指側はゆるくと、2ヶ所結ぶ。
⑤ 2ヶ所の薄葉紙で全体を包み込んだり④と同じように2ヶ所結ぶ。

[茶碗]
① 2つの絹糸を十字になげ、中央に薄葉紙で包んだ茶碗を置く。
② 茶碗を挟んで、上下の絹糸から見た茶碗をくるむ。
③ もう片方の絹糸をもみ込みながら同じように押さえていく。
④ 紐で「井」の字になるように結ぶ。
⑤ ケンポルトにする。(隙間に絹糸を詰めて、ケンポルトの中で動かさないようにする)

[絵画]
① 作品→薄葉紙→クラフト紙→脱脂綿素材(作品の型に合わせてアクリル箱)
② トライバル風(異国ケンポルト)モデルとして大きな箱とケレンの脱脂綿材を用いる(弱く作品)
③ ケンポルトとして重畳品を箱で詰め運搬して、乾いたケンポルトが乾燥状態になる

実習ⅠAの授業で多くの作品の取り扱いをしてきたが、1Aでの感想としては学生委員が行うこととして観点から、梱包実習の取り扱いの仕方と輸送に焦点をあてたもので、作品を輸送する、それを開く、作品に直接触れず保存を行う、作品を保管・移動させるという一連の作業の取り扱い方を学ぶことが出来た。普段から作品の輸送業務も行っているヤマト運輸の方の指導はとても参考となっているが、かようなことから改めて特に、絵画の輸出入の際の梱包の大きさを是非確認しながら、自分から見てきた作品が追加されてきたときの梱包の大きさを考えることで今後の取り組みや感想を感じることが出来る今回の実習で、作品自らの取り扱いや展示場の作り方に加え、感覚まで運ばれてくるまでの事も知ることをでき、より良い視察的な作品や、学生委員会について活かせる運びとなりました。

美学美術史学科3年 (N.O)

実習記録

[illegible]

美学美術史学科3年 (M.N)

実習記録

[illegible]

美学美術史学科 3 年 (R.O)

博物館学課程の受講について

1. 学芸員とは

博物館法によって定められている美術館や博物館、資料館などで働く専門の職員を学芸員といいます。学芸員は資料の収集、保管、展示などの様々な実務を行なうとともに、展覧会の企画や所蔵品の調査研究といった専門的な仕事を担っています。学芸員には、歴史や民俗、自然科学系博物館の学芸員や動物園の学芸員まで幅広い内容を含みますが、本学の博物館学課程は、美術館学芸員の仕事に関連する知識を学ぶように構成されています。

2. 資格取得に必要な科目・単位数

学芸員資格を取得するには必修科目19単位と選択必修科目12単位以上を修得しなければなりません。卒業に必要な単位数に含まれない科目も履修しなければなりませんので、受講にあたっては十分な計画と最後までやり遂げる熱意を持って臨んでください。

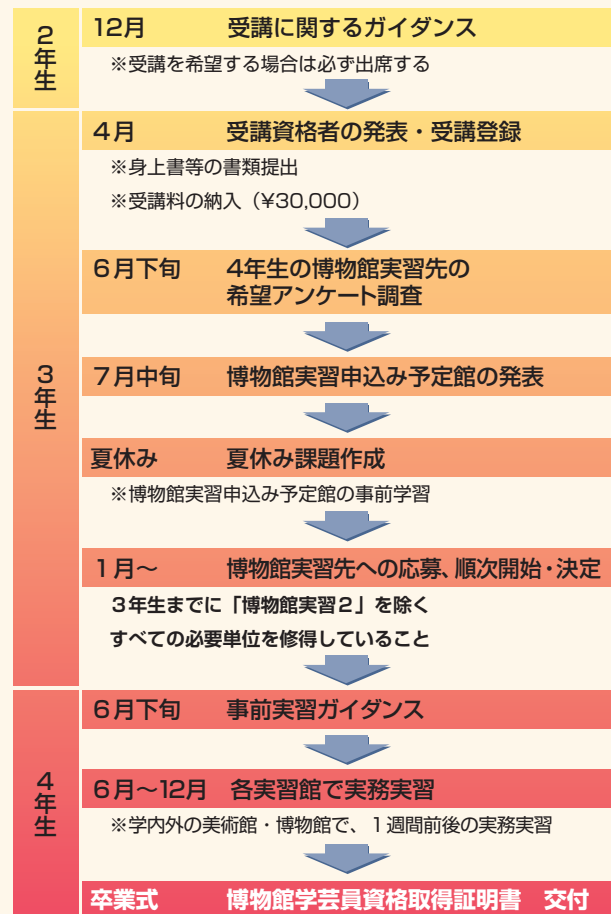
3. 受講にあたって留意して欲しいこと

- (1) 博物館学課程の受講は3年生から始まります。受講にあたっては2年生の後期にオリエンテーションを行ないます。履修要項をよく読んで臨んでください。
- (2) 受講が始まってからは皆さんの資格取得をサポートするために、「博物館実習1b」の中できめ細かい指導（個別も含め）を行なっています。授業の日時や呼び出しについては、随時掲示板とmanabaで連絡しますので、こまめにチェックしましょう。
- (3) 授業でも美術館・博物館への見学実習を行います。普段からも積極的に足を運ぶようにしましょう。

4. 博物館実習について

- (1) 4年生になると「博物館実習2」で実際に美術館・博物館での実習を行ないます。実習先は事前アンケートや皆さんの専攻分野を基に、各実習先の受入条件などを考慮して、博物館学課程で決定します。希望通りにならない場合もありますが、実習先の決定は課程に従ってください。
- (2) 3年生までに「博物館実習2」を除くすべての必修科目および選択必修科目を履修し、単位を修得していないと、「博物館実習2」を履修することが出来ません。しっかりと努力しましょう。
- (3) 博物館実習は、美術館・博物館の方々のご厚意によって受け入れていただいています。自分の行動に責任をもち、貴重な機会であることを心得たうえで、実習に参加してください。

受講の流れ



資格取得に必要な科目・単位数

	科目名	単位	年次
必修 (19単位)	博物館学入門	2	3
	博物館経営論	2	3
	博物館資料論	2	3
	博物館教育論	2	3
	生涯学習概論	2	3
	博物館情報・メディア論	2	3
	博物館展示論	2	3
	博物館資料保存論	2	3
	博物館実習1a	1	3
	博物館実習1b	1	3
選択必修 (12単位以上) ※	博物館実習2	1	4
	美術史概論a	2	3
	美術史概論b	2	3
	工芸史概論a	2	3
	工芸史概論b	2	3
	文化史概論a	2	3
選択	文化史概論b	2	3
	知的財産研究	2	3~
	アート&パブリッシング	2	3~
	パブリック・プログラム研究	2	3~
	保存修復a	2	3~
	保存修復b	2	3~
	保存修復c	2	3~

※詳しくは履修要項を確認してください。

MUSEOLOGY

MUSEOLOGY No.44

発行日	2025年3月6日
発行者	実践女子大学 博物館学課程 〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49 TEL 03-6450-6899 FAX 03-6450-6812
編集	山本 樹(文学部美学美術史学科 助教)
印刷所	日野台印刷株式会社

